

願倍率は0.87倍であった（前年は1.3倍、前々年は1.0倍）。

2月・3月に行われた一般入試では、実質倍率は前期2.6倍（前年1.5、前々年1.9倍）、後期5.4倍（前年1.9、前々年1.9倍）であった。

3月には31名の卒業生を送り出した。うち4年前の2010年4月の入学生は30名である。同年に入学した42名のうち、退学した5名を除くと、卒業できなかったもの（留年者）は7名であった。

今年度、学科志願者を増やすため、広報戦略に詳しい学科OBの協力も得て、学科広報の見直しを行った。その結果、学科コンセプトを「答えを探すな。“問題”を探せ」として、学科で学ぶことを「“環境”で鍛えたチカラは、社会のどこでも通用する。」とした。そして、こうした見直しを学科HPに反映させた（暫定反映をセンター入試直後（1月中旬）に実施、本格反映は年度末に予定）。結果として志願者は、昨年度と比較すると、前期入試で43名から71名と65%増加し、後期入試で75名から127名と69%増加した。来年度は、一般入試の更なる志願者増加と、推薦入試の志願者増加が課題である。

## 環境建築デザイン学科のこの一年

村上 修一

環境建築デザイン学科長

4月に張晴原教授、芦澤竜一准教授を新たなスタッフとしてお迎えし、本年度がスタートした。張先生は、環境工学の専門家として、大学での教育研究に長年たずさわってこられた実績をお持ちである。住宅の温熱環境に関する研究に加えて、設備設計に関わる気象データベースの開発など、数多くの学術論文を著わされている。また、芦澤先生は、新進気鋭の建築家として数々のユニークな作品を生み出され、多数の受賞歴をお持ちである。建築レクチュアシリーズを主催されるなど、現代の建築を積極的に牽引されている。すばらしい実績を有する両先生の今後のご活躍が期待される。

また、本学科は学生の国際交流に精力的に取り組んでいる。毎夏恒例となっている韓国の蔚山大学との合同ワークショップは、新たに中国の厦門理工学院が加わったKJC国際ワークショップとして、9月12日～15日に蔚山大学で開催された。本学科からは学生6名と教員2名が参加した。3大学の学生

が混成チームをつくり、市中心部を流れる大和江の両岸をつなぐ歩道橋の設計に取り組んだ。一方、同9月にはタイのコンケン大学、さらに年末から翌年1月にかけてスペインのセビリア大学で行われた国際ワークショップにも本学科の学生と教員が参加した。このように、建築という共通言語のもと海外の大学との交流拡大が着実に進んでいる。継続性をより堅固にする方策の検討が今後の課題である。

さらに、本学科の学生や教員は様々な地域連携活動にも積極的に取り組んでいる。特に、宮城県気仙沼市では、「域学連携」（総務省地域活力創出モデル実証事業）による中期滞在型活動が8月下旬～9月末に行われ、本学科の学生38名が、地域の方々や他大学の学生とともに、地域の拠点づくりに取り組んだ。学生たちを迎え入れて下さった地域の方々、長期にわたり現地でご指導頂いた陶器浩一教授、永井拓生助教のご尽力に謝意を表したい。一方、今年度下半期、文科省「地（知）の拠点整備事業」（COC）に本学の申請が採択され、高田豊文准教授が地域共生センターを兼務されることとなった。近江楽座やゼミ単位での取り組みなど様々な地域活動が継続中であるが、活動間の調整、成果の蓄積や地域への還元といった実質化に向け、今後のご活躍に期待したい。

学生の自主的、積極的な姿勢は本学科の伝統となっている。本年も学生たちの手で「DANWASHITSU」が開催され、著名な方々にご講演を頂いた。また、卒業研究や卒業制作に関わる行事も学生主体で行われた。発表会の企画や会場の設営からゲストのエスコートに至るまで、今年度の徹底ぶりには目を見張るものがあった。例年より多い39名が設計を、23名が論文を発表し、最終的には全員が卒業した。大イベントを自らの手で成功させたことに自信を持ち、実社会の各方面で活躍することを学生達に願うとともに、この良き伝統を確実に後輩へ継いでいくことを今後の課題としたい。